

京都大学	博士(文学)	氏名	合 田 典 世
論文題目	Joycean Unsatisfactory Equation : Reading <i>Ulysses</i> Verbally (ジョイス的不均衡 — 『ユリシーズ』を言語的／動的に読む)		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>前世紀後半に隆盛を極めた「ジョイス産業」は、今世紀に入ってもなお成長を続けている。しかし、研究書の数の多さやアプローチの多様さが、必ずしも作品理解の向上に直結していないのが、学界の現状である。言葉と指示対象の不均衡な関係を根本的な構成原理とするジョイス作品は、両者の均衡な関係を前提とし、作品と理論を等号で結ぼうとする理論的アプローチとは、そもそも親和しがたいものである。本論文では、このジョイス的不均衡を、『ユリシーズ』中の語を借りて“unsatisfactory equation” (以下 UE) と名づける。このキーワードによって提示・包括されうる、『ユリシーズ』の細部のパターンやテーマ、モチーフ群に着目し、それらに付与しうる小説的意義についての詳細な考察を試みる。UE を本質的に具える本作品において、テキスト上の言葉が常に動的な状態にあり、作品のあらゆるレベルで UE が具現されているさまを、外在的な理論から導出される“equation” に安易に頼ることなく、作品の精読を通してありのままに捉える姿勢が肝要である。以下の4章では、理論的枠組みから切り捨てられてきた細部を、UE という補助線を引くことで照らし出し、こうした細部のはらむ小説的意義の考察を通して、「“unsatisfactory” が“satisfactory” に反転する」というジョイス的逆説によって本作品が支えられていることを論証していく。</p> <p>Chapter I Sustained on the Mourning Air : the Verbal Temporal UE in <i>Ulysses</i></p> <p>本章では、『ユリシーズ』を成立させる二つの UE、すなわち、言語的な UE と時間的 UE について考察する。そこで鍵となるのは、“air”を中心としたモチーフである。まず、作品中の air に見られる言語的 UE、すなわち、言葉とその指示対象の間の不均衡を例証する。air が呈する「大気」と「音楽」の間での意味の揺れが、第1挿話、第3挿話のスティーブンの知覚において観察される。さらに、air の同音異義語である heir もまた、ブルームとスティーブンという二人の heirs の物語においてしかるべき重要性を帯びる。night air の中で腕を組んだ二人の heirs の合一が、スティーブンの歌(air)を予期することで、奇しくも air と heir の結節点を形成するのである。air における言語的 UE をめぐる以上の議論は、もうひとつの UE — 時間的 UE — の議論へと接続される。ここではまず、もう一人の heir たるミリーのモチーフに着目する。娘ミリーの成長に対する父ブルームの複雑な心情は、時の不可逆性を強調するかのよう、走り</p>			

ゆく流れ、あるいは stream of life のモチーフの形をとって、反復変奏される。しかしそこには同時に、髪の毛やスカーフが風に持ち上げられながら (“sustained”) たなびく、一瞬を切り取った静止画のようなイメージも伴う。この sustain のイメージは、水平的流れに逆らって垂直方向に作用するベクトルとして、本作品の冒頭や、11 挿話の歌、5 挿話末のブルームの入浴といったシーンでも登場する。詩的な文体で文字通り sustain される、エピファニクなシーンにおける垂直ベクトルや、「受動」対「能動」をはじめとした対立・拮抗のパターンの背後には、作家のある目論見に裏打ちされた時間哲学が流れている。すなわち、直線的時間における過去・現在・未来という区分を無効化し、「時間」を、多方向ベクトルが共起・混在する、まさしく空気 (air) のごとき茫漠たる「空間」として捉える哲学である。回想行為の表象や、通り過ぎた (passed) ものが文字通り過去 (past) になるという主題もまた、時間の超越を目論む作家の時間意識を体現するものと言えよう。

しかし当然ながら、文学が文学として機能する以上、時はやはり「進行」する運命にある。ここで露呈するのが、水平的進行を司るベクトルの優位であり、すなわち時間的 UE である。多方向ベクトルが拮抗し合い、時の真空が実現されたかのような一節においてもやはり、そこにはベクトル間の「不均衡」が生じており、それによってこそ時間が、そして本作品が、覚醒し作動し始めるのである。時の不可逆性を“mourn”し、それを超越しようとする作家の目論みは、当然、文学という時間芸術の器と unsatisfactory な衝突を引き起こす。しかし結果として生まれたのは、逆説的にも、時の真空化という美しい錯覚に彩られた、きわめて satisfactory な文学作品なのである。

Chapter II Lotus-Eaters Dis-Covered : A Voyeuristic Reading

本章では、「表層」と「深層」の間の UE について、『ユリシーズ』第5挿話を中心として考察する。スキーマによるところでは「皮膚」をテーマとする本挿話は、皮膚そのものへの言及の多さに加え、見た目と内面の乖離へと注意を促す。第5挿話のテキストを織り上げるブルームの意識は、一見したところ、「忘却」の雰囲気支配され、無気力や惰性に満ちている。しかし実はこれは偽の体裁とでも言うべきもので、妻の不倫という悩みの種や、マーサ・クリフォードとの文通という秘密を抱えつつも飄々とふるまうブルーム自身にこそ、「表層」と「深層」の間の UE の萌芽が宿っているのである。果たして彼のものの見方には、「外面」の体裁に覆われた「内面」へと関心が向けられるという傾向が伺える。しばしば parallax (視差)、あるいは、他者の立場を思いやる寛容さに裏打ちされた客観性といった文脈でとらえられるブルームの世界認識は、実は彼自身の抱える UE の反映でもある。本章は、作者の巧妙なテキスト操作によって、抑圧された「内面」が一見単純なテキストの「表層」に滲み出す瞬間を、「窃視的」にテキストを眺めることで掬い出していく。

文通相手、マーサ・クリフォードからの手紙にあったフレーズ、“I will tell you all”は、秘密を内に抑圧したブルームに少なからぬ刺激を与え、一つのモチーフと化し、本挿話のテキスト上を漂う。まず、このモチーフに彩られる形で、ブルームの秘かな告白願望が、キリストの絵画から誘発された思考を描いた一節に影を落としているのを指摘する。さらに、告白願望との関連において、“hole”や“rip”に託された豊かな含蓄を探る。それらは、「穴」のテーマとしてテキスト上に遍在し、ブルームそして作品の「深層」につながる「穴」、「開孔部」として、読者の注意を喚起するのである。

さらに、「穴」のテーマと連関して“behind”のモチーフを形成する、教会のミサでのブルームの思考に分析を施す。彼の宗教への無関心を反映したこの一節には実は、告白願望を抱えながらも、一線を越えられない鬱屈した内面の生み出すファンタジーが、だまし絵のごとくにテキストの表層に滲み出ている。さらに、その思考に現れる戯れ歌をもとに、内面の「秘密」漏洩阻止という観点から、“pin”の意義を考察する。

願望は願望として内に抑圧したまま、現状維持を続けるというブルーム流の生き方が、格好の“textual fantasy”の材料として、テキストの「表層」と「深層」の間のUEを生成し、テキストに豊かな多層性を与える。ブルームよろしく、見た目に惑わされずに、覆われた内部を覗こうとする窃視的アプローチにより垣間見られるのは、ブルームそして作品の「深層」であり「真相」なのである。

Chapter III Curvilinear *Ulysses*

多種多様な理論やアプローチを包摂することでジョイス学界は拡大、発展してきたが、全体的傾向として、理論的・巨視的な抽象論への偏向と、それに伴うテキストの細部の等閑視が挙げられる。こうした学界的主流に一石を投じるべく、本章では、“line”という語から派生していくテキスト上の綱目に着目し、それが、規範と逸脱、記憶と現実といったUEを体現する本質的テーマへと接続されうることを具体的に例証する。

『ダブリナーズ』『若き芸術家の肖像』から主題的な役割を与えられてきたlineは、『ユリシーズ』において、文学作品を形成する最小単位として、その潜在的な意義を拡大する。まず注目すべきは、lineとcurveが共起するモチーフである。モリーの身体の曲線を暗示的に繰り返し喚起する8挿話では、その末尾の一文が、文字通りのlineの混濁のうちに、ブルーム的「規範」、そして標準的英語の「規範」からの逸脱の軌跡としてのcurveを可視化する。

続いて、“trouble”という語の使われ方に見られる、ブルームに対する周囲の誤解や曲解に着目することで、語義の境界線としてのlineの齟齬が、彼と周囲の間の断絶としてのlineを浮かび上がらせることについて考察する。ブルームが、troubleを避け、自身の“satisfactory”な生活の維持を目的として引く「一線」は、あらぬ噂や憶測を招く原因となり、周囲からの断絶を示す“unsatisfactory”なlineに反転することとなる。モリーの不倫を前にしての静観という「一線」が引き起こす心理的葛藤に

も見られるように、ブルーム的 line は、“satisfactory” と “unsatisfactory” の間の境界線の恣意性を照射し、一方から他方への反転可能性というジョイス的逆説を確認させる便となるのである。

最後に、crooked と bent の共起する細部を拾い上げ、こうした一見些細な語が形成していくテキスト上のウェブが、line や curve を軸に展開するモチーフとともに、『ユリシーズ』の “curvilinearity” とでも呼ぶべき特質、とりわけ、本質的な記憶の問題と結びつきうることに議論を進める。「一線を引く」のを身上とするブルームは、妻の curve の奪回という蛮行ははなから考えず、記憶と想像のうちに慰めを求めることで、忍びがたい現実を生きていく。重要なのは、ブルームにとっての生命線たる記憶は欠陥的であり、それがそのまま、ヨーロッパ大陸という離れた場所にあってダブリンの街を再現したジョイスの記憶の欠陥性と重なることである。ここに再び、一見 “unsatisfactory” な記憶が、“satisfactory” な作品の創作エネルギーとしての想像力へと転化するというジョイス的逆説が前景化される。この認識に支えられて初めて、ブルームそしてジョイスの curvilinear な記憶こそが、本作品の whatness であると実感できるのである。

Chapter IV “Twice-Told Tale” Reconsidered : A Verbal Scrutiny of the Eumaeus Episode

物語的興味の乏しさと、クリーシェや言いよどみに満ちた「疲れた」文体を標榜する『ユリシーズ』第16挿話は、実は、周到に練られた「技巧的悪文」で織り上げられた、すぐれてジョイス的な産物である。本章では、このジョイス的技巧を洗い出し、本挿話を批評的クリーシェとしての twice-told tale から解き放つべく、本挿話でブルームが2度回想 (twice-told) する、チャールズ・スチュアート・パーネルの落ちた帽子を拾い上げたエピソードに着目する。その回想を形成する一語一語に細心の注意を払うことによって、語りの表層と深層、記憶と事実、キャラクター間の相似等に、「似非」のテーマとして具現する UE を照射し、twice-told tale を覆う言葉の影像の意味を読み解く。

ブルームの twice-told tale には、仰々しい言い回しでパーネルとの「歴史的」接触を語ることで、屈辱的な一日の埋め合わせを図ろうとする心理や、パーネルと似て非なる自身の現状の問題などが、ひとまずは読みとれる。しかしここで確認すべきは、本挿話の語りには、必ずしもブルームの内面の忠実な反映ではなく、「アレンジャー」たる作者によるテキスト操作の下に置かれることで、ブルームの内面とは別の影像を生み出すことである。テキスト操作の見地から興味深い現象として、“pick up” と “hat” の近接がある。pick up という行為を裏打ちするのは、まさにその “pick” と語源的に縁のある “instinct” であり、果たして、pick が頻出する本挿話は、あらゆる instinct に突き動かされている。とりわけ注目すべきは、回想 (re-collect pick again) への

本能的欲求である。その一例である、ブルームの朝の回想を描いた一節においては、過去を pick up することと、散らかった下着を pick up するという二重の意味が “re-collect” に託されることで、本挿話において回想行為のはらむ意義の多層性が確認される。翻って、“twice-picked tale” たる回想行為においても同様に、pick up は二重に機能する。まず、「帽子」の提喩的機能を踏まえるとき、「落ちた」帽子とパーネルの「落ちた」状態との重なりが明らかになる。栄光から失墜した英雄パーネルに、幸せな結婚生活が既に過去のものとなったブルームは、憧れだけでなく、深い共感を寄せており、果たして両者の identity confusion を示唆する言い回しが散見される。屈辱的な一日の埋め合わせとしてパーネルとの接触を re-collect する行為は、「落ちた」帽子を pick up することで、「落ちた」自身をもすくい上げようとするブルームの本能的志向を反復するものである。ここで見逃してはならないのは、パーネルが、ブルームの敵たるボイランと立場を同じくする adulterer でもあるという事実である。この対立要素もまた言葉の影像のうちに巧妙に埋め込まれており、ここに「似非」のテーマとしてキャラクター間の UE が前景化される。

かくして、twice-told tale から析出されるのは、パーネルの帽子に触れ、それを拾い上げることで、「落ちた」状態、すなわち混沌や矛盾、理不尽に満ちた世界 (UE) から脱出し、秩序的な世界 (SE) へと上昇しようとする、本作品を貫くブルーム的志向である。しかし、現状を静観しながら、ファンタジー的記憶の世界に逃避する彼のこうした試みは、やはり “unsatisfactory” な首尾に終わるよう運命づけられている。それは、twice-told tale の語りの言葉が生み出す影像の不安定さのうちに暗示されるところであると言えよう。

以上の考察を経たうえで、最後に確認すべきは、『ユリシーズ』における、「現実」世界と「フィクション」の世界の関係である。ダブリンという実在する都市に基づき、厳格なリアリズム小説と称されることの多い本作品は、結局のところ、現実世界の忠実な鏡ではない。フィクション内での「現実」は、ヒュー・ケナーの指摘するところの、印刷された言葉の宿命的に内包する言語的 UE に恒常的に束縛され、紙上の言葉が生成していく「余剰」と複雑に絡み合った形で提示される。『ユリシーズ』は、「現実」世界と、フィクションの言葉が生み出すまた別の「現実」世界との不均衡 (UE) のうちに成立する作品なのである。

「現実」と「フィクション」間の UE を、「中心」と「周縁」の関係の攪乱として相似的に捉えるならば、本作品に特徴的かつ本質的なのは、拡大された「周縁」（「フィクション」的「現実」）が、「中心」（実在モデルとしての「現実」）を凌駕し始めるという現象である。こうした「中心」から「周縁」への遠心的拡大の軌跡を考えると、ジョイスの言語的効果は、「仕掛け」の範疇を超えるように思われる。ジョイス研究において頻用されるこれらの呼称はむしろ、あらゆる言語的効果が、作者の「意図」に

回収される静的な存在として、「周縁」から「中心」へと向かっていく求心的な軌跡を連想させる。しかし、ジョイスの言語は、一つの限定的な「意図」の存在を否定するアナーキーなものであり、いやしくも依拠するものがあるとすれば、それは、置かれたページ上に静止することなく、ただ無限に茫漠と広がっていかこうとする、言葉の自動性・自律性への信頼である。こうした無定形な作品を前に、読者に求められるのは、一つの答えの求心的探求ではなく、テキストの動的可能性を遠心的に開示していく、懐疑的な心性なのだと言えよう。

(論文審査の結果の要旨)

ジョイス研究は、しばしば「ジョイス産業」と揶揄されながらも、今なお隆盛を誇っている。新刊研究書も数多く、さまざまな理論あるいはテーマによるアプローチが試みられる場であることは、従来と変わりはない。しかし、新奇さを求めるあまりに、ややもすると作品そのものを置き去りにしたような研究も目につき、必ずしも作品理解が深まったとは言えないのが現状である。そのような事情から、難解とされる『ユリシーズ』は、これまでの研究の膨大な蓄積にかかわらず、解明され尽くしたとはいえない。

本論文は、そのような難攻不落の『ユリシーズ』精読に挑戦しようとした、果敢なところみである。しかも論者は、『ユリシーズ』のたえず変幻する言語のありように注目し、作品の徹底的な精読を通して、『ユリシーズ』をわれわれの目の前にたしかな姿を見せている静止したものではなく、つねに揺れを生じるような動態としてとらえようとする、困難な課題に挑み、大きな成果を挙げた。このことは特筆に値する、本論文の第一の意義である。もちろん、ジョイスの変幻自在な言語芸術そのものに肉迫するためには、高度な言語能力が要求されることは論を俟たないが、論者の用いる英語はきわめて質の高いものであり、この難題に挑戦するだけの資格を有していることを論文みずからが証明していると言えよう。

本論文の第二の意義は、『ユリシーズ』の細部に見られるパターンやテーマ、モチーフ群といった側面を、顕微鏡でのぞくように細かく言語的に分析しながらも、それを論文題目にもなっている「ジョイス的不均衡」という、巨視的な主題にまとめあげた点である。ここで言う「不均衡」とは、テキスト中に出現するある一語あるいは語群が、テキストの別の箇所にも反復されるときに微妙な意味内容の差異を伴うような場合、その両者は等号では結ばず、その不等号が契機となって、元々の出現箇所にもかすかな意味の揺れが発生するような現象を、第一義的には指している。このような言語の微細なふるまいにまず着目するというアプローチの仕方は、在野のジョイス研究者として知られる Fritz Senn が好んで用いているが、ここで論者はそれをさらに一步押し進めて、単に細部の問題だけにとどまらない、芸術家としてのジョイスの独自性を浮き彫りにするような、大きなテーマへと発展させていることは、高く評価できる。

そして本論文の第三の意義は、そのようにいわば文体面での分析にこだわりながらも、それをたえず作品内容の読みへと返すところみに成功している点である。『ユリシーズ』の文体論的アプローチは、過去にもしばしばころみられてきたが、そのほとんどは機械的な分析に終始するものばかりであった。しかしここで論者は、あくまでもそれを作品内容の理解へと展開することを忘れない。とりわけ、「直線」と「曲線」という言葉が何度も変奏されてテキストに織り成していく編目を細かく追いながら、それが「規範」と「逸脱」、「記憶」と「現実」というテーマにつながっていくさまを詳述し、さらにそこから、耐え難い現実を忍びながら生きていこうとする登場人物ブルー

ムの自己防衛本能的な心理の襞をみごとに解きほぐし、それをヨーロッパ大陸という離れた場所に住みながらダブリンの街の一日を再現しようとしたジョイスの創作の根源へと迫ろうとする第三章は、本論文中の白眉と言っていい。

以上のように、本論文は『ユリシーズ』の細部を精読することにより、この作品のとらえ難い姿をそのまま動態としてつかもうとした意欲的な論文であるが、難点がなくもない。特に、時間的な不均衡と空間的な不均衡を通底するものとして論じようとした第一章は、「ジョイス的不均衡」で論文全篇を統一しようとしたために、かなり強引な印象を与えることも事実である。しかしそれは、本論文が扱った問題がどれほど大きなものであるかを逆に裏書きしているとも言える。論者による、このテーマのさらなる展開を待望したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十二年二月十五日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。